

復活している小笠原のアカガシラカラスバト

三間久豊

カラスバトの一亜種であるアカガシラカラスバト〔写真1〕は、小笠原諸島と硫黄三島に棲息する希少亜種で、その数は数十羽と言われてきました。環境省のレッドリストでは、最も絶滅が危惧される種である「絶滅危惧ⅠA類」にランクされ、国の天然記念物にも指定されています。小笠原の人々は、この鳥のことを親しみを込めて“赤ぼっぼ”と呼びます。



写真1 母島のアカガシラカラスバト

その“赤ぼっぼ”が急激にその数を増やしはじめたようです。この夏、小笠原へ行きましたが、7月4日に父島で幼鳥1羽を観察。7月6～7日の母島では、合計でなんと25羽ほどのアカガシラカラスバトを記録することが出来ました。全体で、恐らく100羽ぐらいに増えたのではないかとの推測も地元で出ているようです。〔写真1〕

増加した理由は、ノネコの激減!!

小笠原自然文化研究所が中心となって、野生化した飼いネコを捕獲して本土へ運び、東京都内の獣医師らのご努力で新たな飼い主を探して引き取ってもらう、という活動が続けられています。

ノネコは400頭ほどから、いまは数十頭にまで減ったと言われています。もちろんノネコはゼロになったわけではありませんから、手を緩めるとまた増えます。これからも捕獲作業はエンドレスに続くのかもしれない。

亜種アカガシラカラスバトの増加が永続性のある、間違いないものとなるならば、本当に素晴らしいことです。人をあまり恐れない、愛想のいい“赤ぼっぼ”です。さらに増え続けてくれることを、切に祈らないではられません。



写真2 父島・中央山付近にて

※アカガシラカラスバトの復活には東京都の動物園が中心となって深くかかわっています。そのいきさつについては、本誌2011年6月号の巻頭言「野鳥・Tokyo」で、当時上野動物園園長だった小宮輝之氏が紹介されています。また、2010年6月に私が父島を訪れた際には、生息地の東平地区には、ノネコの捕獲カゴが多数設置されたり、ノネコ・ノヤギの侵入を防ぐための柵が造られていました。また、一帯の入場を制限したり・管理したりといった保護対策もとられていました。〔写真2〕 (川内 博)

研究部月例会へのご案内 12月6日(金)

新しい鳥類目録・『日本鳥類目録改訂第7版』が出されて1年以上たちますが、その配列には少しはなじまれたでしょうか。大幅な改訂が突然出されたので、多くの方は戸惑われたことでしょうか。当会にはすぐには採用せず、今まで通りの配列を使っていますが、いつまでもとはいきません。来年には徐々に新目録に移行していく予定です。そこで、今回の改訂に携われた、山階鳥類研究所の平岡 考氏をお招きして、新目録の改訂のいきさつや、最近の分類の話をお聞きすることになりました。ちょっと小難しい話になるかもしれませんが、“耳学問”として有用と思います。お出かけください

日 時：2013年12月6日(金) 午後6時30分開場・7時～9時

場 所：日本野鳥の会東京・事務所〔新宿区新宿5-18-16 新宿伊藤ビル3階〕

参加費：無料 参加申込：不要 ※ 来年度の研究部の活動についても話し合います。